

5歳児教育プログラム 狙いは

小学校と連携 学びの移行円滑に

幼稚園や保育所の5歳児向け教育プログラムを新たにつくるようと、文部科学相の諮問機関・中央教育審議会の議論を進めている。小学校での学習に向けた土台をつくる狙いだ。どんな内容で、なぜ必要なのか。

11月初旬、栃木県佐野市の認定こども園「あかみ幼稚園」の年長クラス。5歳児らが、粘土でつくった「リンゴアメ」に色を塗ったり、段ボールに絵を描いたりしていた。園内で開く「お祭り」の準備だ。

園児たちは夢中で作業しながら、時折、壁のアナログ時計を見上げた。先生が「そろそろお片付けかな？」と呼びかけると、「(長針の位置が)8までじゃないの？」と確認する声も上がった。

園児たちは朝、先生と一緒に1日の予定を確認し、行動する。長島弥生副園長(49)は「見通しを持ち、区切りをつけることを学んでいます。休み時間が短い小



粘土でつくった「リンゴアメ」を並べる年長児＝2日、栃木県佐野市赤見町のあかみ幼稚園(画像の一部を加工しています)

■文部科学省が示した幼児期の終わりまでに育ってほしい「10の姿」

- ①健康な心と体
 - ②自立心
 - ③協同性
 - ④道徳性・規範意識の芽生え
 - ⑤社会生活との関わり
 - ⑥思考力の芽生え
 - ⑦自然との関わり・生命尊重
 - ⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
 - ⑨言葉による伝え合い
 - ⑩豊かな感性と表現
- ※中教審の資料から

学校との接続にも役立っていると思います」。

あかみ幼稚園では、子どもたちが自由に遊びながら、結果的に小学校につながる学びが得られるよう取り組んでいる。例えばパン屋さんごっこでは、違う形のパンに値段をどうつけるか疑問を持つ子がいれば、一緒にパンの模型の重さを量って考える。

一方、運営する学校法人の中山昌樹理事長(61)によると、学力が重視されがちな小学校との相互理解は不足していた。「自主性を育んでも、小学校で学力を巡る『締め付け』に悩まされる子がいたし、遊びにも『ほったらかしにしている』という誤解があった」

そこで進めたのが、小学校との連携だ。県幼児教育センターに相談し、2015年度に地元の小学校教員とともに8回研修を開いた。協力して、年長の終わりから小1の始めまでの学びの具体例を盛り込んだ接続カリキュラムを作った。

自主性を重んじる教育を理解してもらい、小学校では入学直後に行っていた係の割り当てをやめ、やりたいうことに取り組むうちに自然に係分けをするようになった。幼稚園でも、遊びが

委員からは「行き過ぎた早期教育にならないように」「小学校の先取りではない」といった趣旨の発言が出ていた。遊びを基本とする従来の幼児教育を踏まえ、質の高い学びにつながる工夫が盛り込まれる見込み。小学校で情報端末が全員に配られていることをふまえて、タブレット端末などの活用例にも言及する見通しだ。

施設間の差が課題

日本保育学会理事の汐見稔幸・東大名誉教授の話。子を預かるだけで精いっぱいという施設もあり、質のばらつきは課題だった。家庭の教育力に格差があることを踏まえても、平等に教育が受けられるようにするモデルが必要だ。先生が研修機会を確保できる環境づくりを進めてほしい。

過度な早期教育防ぐ工夫も

中教審特別委で議論されているのは、「幼保小の架け橋プログラム」。幼児教育にだけだけでなく、幼児期の学びを生かせるような小学校教育についても検討するという。